

# 新しいマーチング指導法

## —マーチングにおける既成概念の排除—

(平成 27 年 8 月 31 日受付, 平成 27 年 10 月 20 日受理)

## New marching teaching methods

## —Elimination of stereotype in marching—

奈良学園大学人間教育学部

大西 雅博

ONISHI Masahiro

Nara-Gakuen University

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：マーチング, 指導法, マーチングベーシック, マーチングマニューバリング

**Abstract** : In 1970 it held the Japan World Exposition the machine, although it is at once evolved Japan marching, most of which have started from the United States of impersonation.

And technology that has rapidly developed in the favor, and accepted without match the stature of the Japanese, there is a status quo that has been practiced even now as a basis basic. Representation of the music that marching is transmitted to Japan, but are trying to elapse about half a century began working in earnest, its style in Japan has not been established. Enters from the "shape" 50 years ago, although it is marching who started from American, there was a notion that the Japanese are familiar it is less special to. Leaders of schools even less opportunity in contact with the marching, was not less also be swayed by the wrong knowledge and information.

In this way, in Japan with little opportunity to eye the marching, along with the leaders get the right knowledge, it is important to study the meaningful teaching methods to children, young people.

In this paper, it is not caught in the traditional "form", to pursue a more efficient and practical teaching method, you want to and that can be utilized in the field.

**Keyword** : Teaching methods, Marching basic, Marching and maneuver ring

### 1、アメリカからの輸入

1970 年開催の日本万国博覧会を機に、一気に発展した日本のマーチングであるが、そのほとんどがアメリカのモノマネから始まっている。

そのお蔭で急速に発展した技術も多いが、日本人の背丈に合致しないまま受け入れられ、現在も基礎基本として実践されている現状もある。

#### ① 演奏場所の違い

アメリカでは、アメリカンフットボールのフィールドで行うことが多い。サイズは 100 ヤード× 50 ヤードで、ほとんどの場合屋根は

ない。日本では、30 メーター四方の枠の中で動くことが多く、そのほとんどがアリーナで屋根が存在する。

#### ② 演奏楽器の違い

アメリカのマーチングは、金管楽器・ドラム・カラーガード・パーカッションという編成が多い。日本では、吹奏楽が主流のため、金管楽器・木管楽器・パーカッションという編成が多い。

#### ③ 環境の違い

アメリカのハイスクールには、9 割以上の学校にアメリカンフットボール部があり、ほぼその数だけマーチングバンド部も存在する。ハーフ

タイムショーでは、マーチングとチアリーディングが活躍をする。日本では、高校野球において吹奏楽部が応援をする習慣はあるが、観客席での座奏がほとんどである。

#### ④ ルーツの違い

アメリカでは、青少年健全育成のために、ドラムコー・インターナショナルが設立され、多くの寄付金によって組織が運営された。日本では、学校現場での部活動として位置づけられ、限られた予算の中での活動を余儀なくされた。

マーチングという音楽の表現方法が日本に伝わり、本格的に取り組み始めて約半世紀が経過しようとしているが、日本におけるそのスタイルは定着していない。50年前に“形”から入り、アメリカ人のマネから始めたマーチングであるが、日本人には馴染みが少なく特殊なものであるという概念があった。学校現場の指導者もマーチングに接する機会が少なく、間違った知識や情報に振り回されことも少なくなかった。

このように、マーチングを目にする機会の少ない日本においては、指導者が正しい知識を得るとともに、子供たち・若者たちに有意義な指導法を研究することが重要である。

本稿では、従来の“形”にとらわれず、より効率的・実践的な指導法を追求し、現場で活用できるものとした。

## 2、場面に応じた演奏と動き

「マーチング＝大きな音」というイメージが今だに消えない。その音量は、アメフトのスタジアムで演奏する時のものではないか。日本の狭い体育館やホールにおいては、さほど大きな音は必要ない。最近では、アメリカのスタジアムですら、管楽器・打楽器共に無理をして大音量を出すことはしない。

### 【ステージマーチング】

ホールでの演奏の場合、ほぼ普段の吹奏楽の音量で演奏すると良い。反響版があればさらに無理をせず、無くては楽器を会場に向ければ解決する。また日本人は、マーチングスネアやテナードラムのハイテンションサウンドに耳が慣れていない人が多い。打楽器は、基本的に吹奏楽で使用するパーカッションを中心に構成し、マーチングパーカッションはドラムショーなどフィーチャリングする時のみ登場すると効果が高い。

しかしここで大きく勘違いをしているバンドを多く見受けられる。「マーチングパーカッションを使わなけれ

ば、マーチングではない」という概念から、頻繁にハイテンションのドラムが鳴り響く。そして、演奏者たちは「これぞマーチング」と自己満足に浸る。しかしながら、観客はバランスの悪い音楽と、大きな太鼓の音に不快感を持ち、マーチングに対する魅力を見出すことが出来ない。まさに、この観客と演奏者、需要と供給の格差が、世の中にマーチングが認知されない大きな要因であると考えられる。

マーチングドラムの奏法や楽器の構造は、広い屋外で一気にも音が遠くへ飛ぶように、高い周波数に設定されている。基本的には、複数台の楽器のサウンドが音楽にブレンドするように構成する。しかしながら、ステージで一台のハイテンションスネアと30人の管楽器を音楽的にブレンドすることは、大変困難である。にもかかわらず、アメフトのスタジアムで演奏しているスタイルのままスネアドラムを演奏し、これがマーチングであると定義づけているバンドも少なくない。

音楽をより深く感じ、大きく表現するために動きとコラボさせる。それがマーチングの大きな魅力であり、使命であるにもかかわらず、音楽とは無関係に“形”にとらわれ、音楽を追求することを忘れてしまっただけの本末転倒である。

例えば、アフリカをテーマに構成したとき、マーチングパーカッションはどれほど必要であろうか？それは日本をテーマにしたときも同様で、一つ間違えば大変滑稽な音楽になってしまう。しかし演出・編曲によっては、大きな効果を生み出すことも可能である。特殊な楽器ゆえに、使い方次第でその効果も多種多様である。「自分たちが何をやりたいか」ではなく、「何を伝えたいか」を明確にし、観客のニーズに応えられる音楽づくりが求められる。

また、狭いステージでこれでもかと動き回るマーチングを見かけることがある。これもスタジアムで動き回るDCIの影響であろうか、音楽とは無関係にドリルが展開していく。ホールの構造上、客席からステージが一望出るホールがほとんどである。つまり、リビングでテレビの画面を見ている状態とよく似ている。幅が100ヤードあるスタジアムと異なり、眼球が左右に動くことは少ない。この状態で、ステージ上で動き回ったとしても、その効果はいかかなものだろうか。

前述したように、音楽で表現したいことをさらに観客にアピールするために動くことを基本とし、無駄な動きは省略する方が、動いた時の効果がより高くなる。また音楽の方向性を意識した、自然な流れのドリ

ルが美しい。音楽は、バラードを朗々と歌っているのに、スタッカートのマークタイムをしているバンドをよく見かける。「マークタイムはこうでなければならない」という間違っただ概念が、足踏みのパターンを一種類しか持っていないという残念な結果を導いている。

### 3、吹奏楽連盟のマーチング

1988年に第1回全日本マーチングフェスティバルが開催される。当初は、規定課題のあるパレードコンテスト部門と規定課題のないフリーな形態のフェスティバル部門で構成され、支部大会においてはその両方にエントリーすることが可能であった。

パレードコンテストの衣装は体操服を基準とし、気軽に取り組めるマーチングを目指した。楽器も普段使用している吹奏楽の楽器をもって、一歩歩けばマーチングが出来ることを強調した。その成果もあり、年々多くのバンドがマーチングに取り組み始めた。

以前から日本マーチングバンド・バトントワーリング連盟の大会にエントリーしていたバンドは、フェスティバル部門にもエントリーするようになり、その相乗効果により、日本におけるマーチングの知名度が徐々に高まっていった。

しかし、全日本吹奏楽連盟の意図とは裏腹に、マーチングの普及と共にその華やかさを追求するバンドが増え、演出にお金をかけ始めた。衣装・プロップ・楽器等、どんどん華美になっていく中、連盟は2007年に、規定課題のあるパレードコンテスト部門を基にした形で両部門を統合した。そして、大会名称を全日本マーチングコンテストと改めた。

この変更により、衣装は体操服以外も認められたが、過度な演出や、華美な服装は認められていない。一見、原点に戻り気軽に始められるマーチングが復活したようにも見えるが、この頃より規定課題に対する解釈がどんどん厳しくなり、初めて取り組む指導者には大変ハードルが高くなった。

全日本吹奏楽連盟の当初の意図は、吹奏楽の楽器を持って、一歩歩けばマーチングであったが、現在はそうはいかない。細かい解釈の存在する規定課題をクリアしなければ、減点対象である。いくら素晴らしいサウンドで、一条乱れない演奏演技をしても、規定課題に違反すると、まず全国大会への出場はあり得ない。

連盟としては、「コンサートバンドがそのまま演奏しながらパレードをしよう」という一貫したコンセプト

トで取り入れたマーチングであったが、28年の歴史の中でどこか噛み合わない決まりや規定課題に変化しているように思う。

現在の規定では、「コンサートバンドのまま演奏してマーチング」をすることは不可能である。パーカッションピットの使用を禁止されているため、マーチング専用の打楽器を使用しなければならない。また吹奏楽の編曲では、マーチングパーカッションの楽譜は書かれていないため、マーチング用のアレンジが必要となる。

派手な演出をしなくても、特別にお金をかけなくても、気軽に取り組んでほしいという連盟の取り組みは、特に学校現場においては有難い。しかし現実には、マーチングパーカッションやマーチング管楽器を購入する必要があり、吹奏楽部の予算では困難となる場合が多い。また、規定課題をクリアするために、専門家に指導を依頼しなければならないが、その費用を捻出できない学校も少なくない。

また、音楽表現を大切にしたいという連盟の意図を踏まえ、音楽的な効果を考えた時、マーチング打楽器のみよりも、パーカッションピットの楽器を使用した方がより高い効果を追求できるのではないかと。しかしながら、規定課題を優先するため、多くの打楽器の使用が禁止されている。そしてその規定課題が、新たにマーチングに取り組もうとする指導者のブレーキになっていることは、否定できない。連盟としてマーチングをどの方向に進めたいのか、気軽に取り組めるマーチングとは、どのようなものなのか、疑問は膨らむばかりである。

初めてマーチングを取り入れ、1987年に開催された全国大会のプレイベントでは、フロアに信号機や病院や公園などの設定をし、その中をパレードした。規定という形ではなく、病院の横を通過するときは音量に気を配りましょう、隊列の途中で信号が変わったら、前半の列は足ふみをして待ちましょうなど、自然なルールを学べた気がする。

今年28回目を迎えることになった全国大会であるが、技術的な進歩には目を見張るものがある。しかし、「気軽にマーチング」を始めるためには、やや方向性を改めて考察する必要があるのではないかと。

規定課題を守り、その範囲の中で表現の工夫をすることも、大切な学習である。しかし、コミュニケーション能力の低下や、自己アピールの苦手な子供たちが増加している昨今、自由な発想を伸ばせるようなマーチングが望まれるのではないだろうか。

# マーチングコンテスト 2015年度 規定課題

## 大会の基本理念

この大会は「コンサートバンドがそのまま演奏しながらパレードをしよう」という一貫したコンセプトのもと開催されており、過度な演出や華美な服装を求めてはいません。  
多くのバンドにコンサート活動とともにマーチング活動も気軽に取り組んでいただきたいと願っております。

## 1. 規定課題

規定課題は、出演者全員（ドラムメイジャーを含む）が行う。ただし、身体的な事情により規定課題を行えない場合は、事前に届け出をした上で許可を受けること。なお、規定課題の実施中、原則、ドラムメイジャーは隊列の先頭に位置し、指揮を行うこと。また、ドラムメイジャーは1名とする。

① 3列以上の隊列が四角形ラインに沿って行進しながら一周する。

【解釈】

- (ア) 隊列の一番外側が常に20mライン上または20mラインを越えていること。
- (イ) 行進は連続して行い、隊列全体が停止しないこと。
- (ウ) 隊列全体がスタート位置に戻った時点で一周とする。
- (エ) コーナーのターン（90度方向転換）の方法は自由とする。

② 3列以上の隊列がセンターラインに沿って行進をしながら、180度方向転換（各列Uターン）を1回以上行う。

【解釈】

- (ア) 方向転換前後、2歩以上直進すること（3歩目以降から次の動作にはいること）。ドラムメイジャーはターンの指揮を行い、自らも180度のUターン（Iの字ターンも可）を行うこと。
- (イ) センターラインは、縦横どちらでも良い。

③ 足踏み演奏（マークタイム）を連続32歩間以上行う。

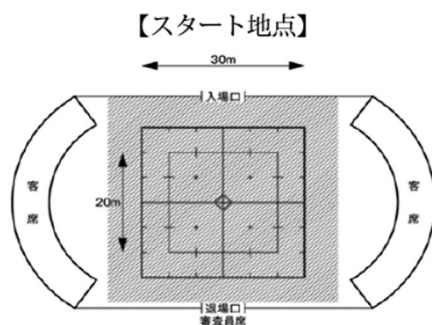
【解釈】

- (ア) かかとがはっきりと上がっていることが確認できるように演技すること。
- (イ) 32歩目で次の動作に移ることは可とする。
- (ウ) 足踏み演奏（マークタイム）をしながら方向転換（ピボット）することは可とする。

■ 上記、①、②、③のいずれかひとつでも行わなかった場合、失格とする場合がある。

## 2. 手具・大道具等・使用楽器・指揮者

- ① 手具の使用については、大会の基本理念に沿うこと。
- ② 大道具・ピット楽器の使用は認めない。
- ③ メイジャーバトン・フラッグの放り投げは、危険防止の観点から禁止とする。
- ④ 編成は木管・金管・打楽器とする。エレキベース、ピアノ、チェレスタ、ハーブの使用は認めない。
- ⑤ ドラムメイジャーの他に指揮者を置く場合は、指揮者は規定課題を行わなくても良い。



スタート位置は斜線部からとし、基本は30m×30mとする。はみ出し部分は入退場口側を除き5m程度とする。

入退場は、合計1分以内で安全かつ、速やかに行うこと。スムーズな運営にご協力ください。

日本の現状を踏まえ、マーチングを通じて技術のみならず、大人が若者たちに何を期待し、どんな教育をしていくのかを考えたい。そして、マーチングを教えるのではなく、マーチングで何を学ばせたいのか、指導者が明確な信念をもって取り組まなければならない。

## 4. マーチングコンテストへの取り組み

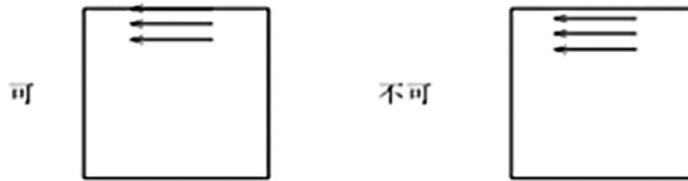
様々な問題点はあるものの、全国大会が存在する以上、それに向けて指導をしていかなければならない。過去の成功例も参考に、全日本マーチングコンテストへの取り組み方について考察を深めたい。



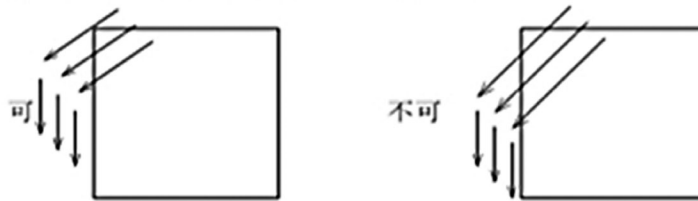
## 規定課題と解釈の詳細

### ①の(ア)

行進(前進)の方向は右回り、左回りとも可。外側の列が必ず20mラインより外側に位置する。



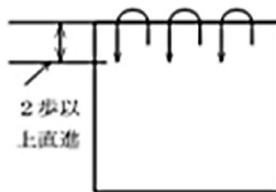
コーナーのターン方法は自由であるが、隊列が斜めに入り90度の方向転換をした場合、下図のように20mラインにかかっていること。



(ウ)については、スタートの隊形と一周したときの隊形は同じとする。

ドラムメイジャーは20mラインに拘らないが、隊列の先頭に位置し、指揮を行う。

### ②の(ア)



方向転換前後、2歩以上直進すること  
(3歩目以降から次の動作にはいること)。

ドラムメイジャーはターンの指揮を行い、自らも180度のUターン(1の字ターンも可)を行うこと。

180度のターンは、行進(直進)しながら行う。

③マークタイムはかかとの上がりが分かるように実施し、ドラムメイジャーも同様に行う。

【資料—1 全日本吹奏楽連盟マーチングコンテスト規定課題より】

### 【音楽の作り方】

- ① テーマ性を重視するよりも、その年のメンバーにとって最も良いサウンドが得られる曲を選ぶ。
- ② 音楽のジャンルは、ある程度関連を持たせる方が、ショーとしての流れは良くなる。
- ③ 優秀なソリスト・アンサンブルは大きな戦力となるため、早いタイミングで登場させるとそのバンドの印象として残すことが出来る。
- ④ マーチング協会と異なり、ファーストプッシュという言葉はあまり使用しないが、オープニングで、質の良いフルアンサンブルを聞かせることの効果は高い。
- ⑤ 強弱・テンポのみならず、音のスピード感や温度・色の変化なども追求し、音楽のコントラス

トを明確に表現する。

- ⑥ マーチングパーカッションの使い方を研究し、管楽器のサウンドを潰さないように留意する。

### 【ドリルの作り方】

- ① オープニングは、動きを見せるより、良いサウンドを聞かせてスタートする方が、好感度が高い。
- ② パレードは、伴奏とメロディーのバランス、またフレーズや曲の流れを考え、動きの方向性と音楽の方向性を合わせる。そのためにスタート位置を工夫することも必要である。
- ③ ユーターンの方向は、センターラインに沿って横向きに行うのは高度な技術を要する。前後に進行し、曲の流れに合わせて前から後ろか、後

ろから前かを判断し、音楽の表現に合わせると効果が高い。

- ④ MT 32では、最も自信のあるソロ・アンサンブル等を聞かせ、音楽をより立体的に表現できるステージングを工夫する。
- ⑤ DM(ドラムメジャー)は帽子を着用していない場合、基本的には敬礼をしない。また、パフォーマンスとして敬礼をする際は、右手で行う。

#### 【MM(マーチング・マニューバリング)】

- ① 曲にあったMT(足踏み)を練習する。バラード・ロックなどのジャンルによって、または、スタカート・テヌーのようなアーティキュレーションによって、またはテンポによって、それぞれ音楽の流れに合わせてMTの形やタイミングを研究する。
- ② テンポに合ったステップの練習をする。特に遅いテンポでの、RM(後進)とFM(前進)のタイミングを合わせる。
- ③ FM、RMともに、ステップinとoutのタイミングを揃える。
- ④ スライドステップは、FMやRMと同様に、重心の位置がずれないように注意する。

#### 【練習の進め方】

- ① パレードの列の揃え方は、足元は勿論のこと、横列の頭の位置も合わせる。
- ② 音楽の流れを損なわないように、楽器の向きや音量の工夫をする。
- ③ コントラストを明確に演奏し、色が変化する場面では、動きのスピード感も変化させる。
- ④ 「ワン・ツー・ワンツースリーフォー」のコールは、音楽の邪魔になることもある。それがマーチングの決まりだと思わず、ショーの流れや音楽の雰囲気に合わせて工夫する。
- ⑤ パレードは、長い列の場合、DMの足を見て合わせる。右側しか見えない楽器があるため、時計回りの行進の方がDMを見やすい。
- ⑥ パレードでは、楽器が横向きや後ろ向きになる場面が生じるが、音量が急激に変化しないよう、音楽の流れを大切にす。

以上の項目について、さらに現場においては、どのような指導を展開すればよいのか、準備から企画、効

率の良い練習方法に至るまで、より具体的に検証したい。

#### 【音楽の作り方～企画・選曲】

##### ① 企画・準備

課題曲のマーチで外周パレードを実施し、その前後には全く関連性のない楽曲を継ぎ足したショーを、以前はよく見かけた。いかにも、間に合わせ感満載のマーチングである。これは、吹奏楽コンクールからマーチングコンテストまでの日程が近く、新曲でマーチングをする余裕がないためであろう。

少しでも楽曲のクオリティーを上げるため、私がかかわっている学校では、3月までに選曲を決ませ、4月末に人数の確認をして、5月中旬にドリルシートを渡す。そして6月末までに音に乗せて一端通せるようにする。7月から8月にかけて、吹奏楽コンクールに集中し、8月末の支部大会終了後に、再びマーチングを思い出し9月の予選に臨む。

一見、忙しいようであるが、指導者がきちんと段取りをすることによって、今やるべきことが明確になり、子供たちは迷わずに集中できる。こうして、年間スケジュールを確立したバンドが、全国大会へ駒を進めている。

##### ② 構成

以前はお決まりのようにフロアの後ろでファンファーレを吹き、そのままパレードに入っていた。これは、全国大会の会場の関係で、フロアの後ろからのスタートが義務付けられていたためである。近年は、スタート位置の指定が解除されたため、わざわざ音の飛びにくい後ろでファンファーレを吹く必要はなくなった。にもかかわらず、後ろからスタートするバンドは意外に多い。以前からの習慣であろうが、人数の少ないバンドや中学生には厳しいと思われる。基本的に、フォルテは前方で、ピアノは後方で演奏をすると、無理なく効果が得られる。規定課題の関係があり全てに適應されるわけではないが、極力この原則に沿って曲目とドリルを展開すると、理不尽に「大きな音」を要求しなくて済む。

##### ③ 選曲

パレードの曲目は、力のある高校生は王道のマーチを演奏すると好感度は高い。しかし、オー

ソドックスなマーチは、高度な演奏力を要するため、観客を納得させる演奏はかなり難しい。特に中学生にとっては、演奏力の差が明らかになってしまうため、慎重に選びたい。マーチではないが、一時、ヤン・ヴァンデルロースト氏の「アルセナル」でパレードするバンドが多くあったが、成功しているバンドは数少ない。全国大会で、上手いバンドを見て自分たちもやってみたいと思う気持ちは大切であるが、レベルとその効果を見極める必要がある。

#### ④ 編曲

吹奏楽曲を使用する場合、打楽器パートをマーチングパーカッションに置き換えなければならない。その際、スネアドラムの楽譜をそのままハイテンションのスネアドラムに置き換えてしまうと、原曲の意図を大きく損なうことが多い。

現在日本でも多く普及しているマーチングスネアドラムは、大変高いピッチにセットできるものが多い。これは、アメリカDCIの流れで、6万人収容のスタジアムにおいて、素早く遠くまで打音が届くよう設計されている。倍音が少ないため、単発では貧弱なサウンドになるが、複数台同時に演奏すると、効果は絶大となる。

しかしながら、マーチングコンテストにおいては81名という人数制限や、曲の性質を考慮した場合、8台～10台のスネアドラムを使用することは無い。このハイテンションスネアドラムを含めたマーチングパーカッションを、吹奏楽連盟のマーチングコンテストに使用する場合、台数・音量・楽譜について慎重に対応する必要がある。

#### 【ドリルの作り方～パレード・Uターン・MT】

- ① パレードは、3列以上の縦隊という規定があるが、4辺のうち後ろのラインは出来るだけインターバルを狭くすると、頭の位置が合わせやすい。前からスタートして、横向きの行進から縦の列になるところは、インターバルが広くても頭や肩の位置は、フロント側から見ると気にならない。

しかし、後ろのラインで再び横向きの進行をする場面では、正面から全ての列が見渡せるので、誤差は5cm以内で揃えたい。

- ② パレード中4回のコーナーは、各バンドの創意

工夫や力の見せどころではあるが、演奏が乱れやすいポイントでもある。難しいテクニックと良い音を天秤にかけると、音を優先させる方が賢明である。楽器の方向が変化するため、フレーズ間や強弱など、違和感のない90度方向転換にしなければならない。

- ③ Uターンは、センターラインに沿って、縦または横向きに行わなければならない。音楽の流れによって、縦または横の判断をすると良い。横方向のUターンを行う場合、音楽への影響は比較的少ないが、正面から審査をする関係上、自分たちの横方向の列を揃えなければならない。縦列のカバーは前に合わせるため容易に揃うが、横列のカバーは180度の視野を持って合わせなければならない。しかも、両隣はたいてい2.5mほど離れている。この関係で、正面から見て、頭の位置まで合わせるのは至難の業であろう。縦方向の場合、静かに始まりクレッシェンドしてピークを迎えるような曲を使い、前から後ろへ行進し、後ろでUターン、そして前に行進しながら音楽も前向きに運んでいく。また逆に、ファンファーレで始まり、静かに閉じていくフレーズの場合は、前から後ろへ展開するとより一層音楽が生きてくる。このように、音楽の流れを上手く利用する形でUターンを構成すると、音楽と動きのコントラストもより明確になる。

- ④ MT 32拍の規定課題は、バンドの持っている本来の演奏力を、最大限に発揮する絶好のチャンスである。長い時間同じ形を見せることになるため、ハートの形・ト音記号・音符など、それぞれのテーマに沿った絵を描くことも多い。

その際も、ソリストのポジションをはじめ、アンサンブルや全体のサウンドが、最もよく響くステージングを工夫することが大切である。

- ⑤ DMの存在が義務付けられているが、列の先導・メジャーバトンによる動きの指示・音楽の指揮など、本来の役割を果たした上で、パフォーマンスも期待したい。パレードのフロントラインでDMがよく敬礼をしているが、本来は軍隊において制服制帽の着用時に、脱帽しないで挨拶する手段として行われた。アメリカDCIにおいては、軍隊のマーチングとアメリカンフットボールのハーフタイムショーの融合で現在に至っているため、DMは指揮台の上で着帽して

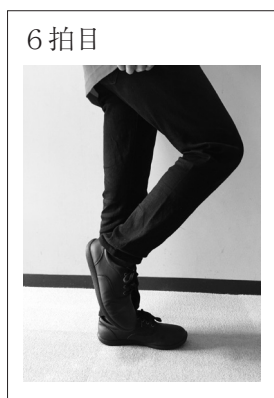
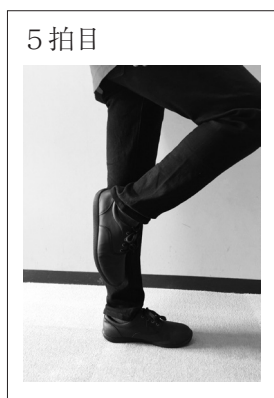
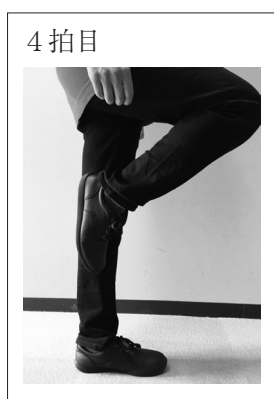
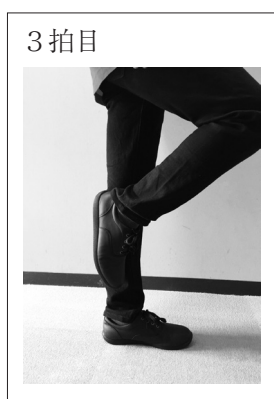
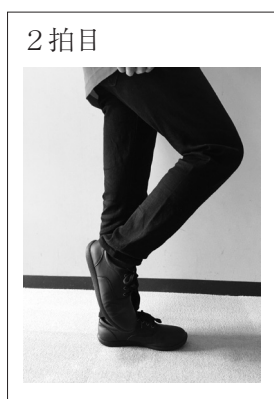
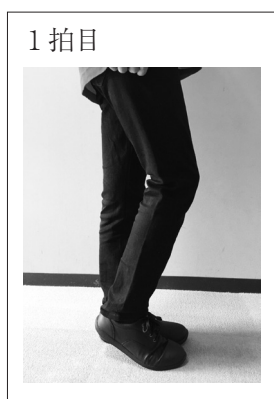
敬礼を行っている。しかし、その直後に脱帽して会釈することが多い。子供たちには、このようなプロセスも踏まえて指導したい。

### 【練習の進め方～基本(MM)・応用】

- ① 最近では、実際のドリルでハイマークタイムを使用するバンドが少なくなり、練習にも取り入れなくなっていることが多い。しかしながら、この一番高いところまで足を上げるMTは、大変効果の高い練習ができる。

ゆっくりと4拍で膝までつま先を上げ、同じく4拍で下ろす。8拍めの裏拍でかかとを地面に着け、次の1拍目に反対の足を上げ始める(写真-1参照)。

### 【写真-1】



7 拍目



8 拍目の裏拍



このテンポを徐々に速くし、一分間に120回の足踏みが出来るように練習する。これを基準に、徐々に高さを低くしたMTを練習すると、音楽の裏拍を意識出来るようになり、ビート感に合致したMTが出来上がる。

このMTの考え方が基本となり、同じようにFMやRMの足の運びを4分割し、ステップin及び、ステップoutの練習に応用することが出来る。

- ② FMのスタイルは、チームによってさまざまであるが、現在の日本においては、つま先を上げてかかとから着地するローリングステップが一般的になっている。その際、膝を曲げてステップoutするか、曲げずに次のステップに行くかという違いはあるが、それぞれの裏拍で両足が行違う形が多いのではないかと。練習方法としては、1と2との「と」のタイミングで両足が行違うように意識することが多い。この練習は、ミディアムテンポ以上の速さであれば問題ないが、スローテンポの場合、ステップoutのタイミングが揃わないことが多い。

そこで、1と2と、という2分割ではなく、MTのトレーニング同様、4分割で練習すると合わせやすい。

1拍を4等分し、1で左足のかかとが着地、2で右足が地面から離れ、3で両足が行違う、4で右足が、左足を追い越す。次の1で、右足が着地する(写真-2参照)。RMは、一般的にかかとを上げて歩くバンドが多い。特に遅いテンポにおいては、ステップoutのタイミングが合わせ難いので、2でつま先を地面から離す意識を定着させると良い(写真-3参照)。



### 【写真—2】

1 拍目



2 拍目



3 拍目



4 拍目



### 【写真—3】

1 拍目



2 拍目



3 拍目



4 拍目



- ③ 規定演技である外周パレードにおいては、楽器の方向性が重要なポイントとなる。四辺のうち必ず一辺は後ろ向きとなるため、音楽のフレージングや強弱、そして伴奏とメロディーの関係を細かくコントロールする必要がある。例えば、フロントラインからスタートした場合、先頭の列は直後に後ろを向くことになる。先頭列がメロディーを演奏する曲の場合、フロントではなくサイドからスタートしてメロディーがフロントで演奏できるようにしたい。また、音楽の流れが、徐々に盛り上がっていく場合は、まずバックラインを通過してサイドからフロントへクレッシェンドで迫ってくると効果がより高くなる。
- ④ パレードにおいては、特に打楽器の音量を細かく調整する必要があるが、合奏の状態とは大きく

異なる。フロントラインでは、ベースドラムのヘッドが客席方向に向くため、打音がより明確に聞こえる。そのため、サイドラインでの音量より大幅に抑えるとともに、ビーターをヘッドの中心からやや外して、音の輪郭を少し柔らかく演奏すると良い。この打点は、フロントからサイドラインに移動すると、徐々に中心へ戻しながら、音量も少しずつ強く演奏すると、客席では自然な音楽の流れに聞こえる。

またこの打楽器の調整は、ユーターンにも適応し、自然な音楽の流れを表現したい。

- ⑤ アリーナ全体を響かせる力を持ったバンドには、必要のない事柄であるが、中学生や人数の少ないバンドにおいては、パレード中の管楽器も微妙な音量調整が必要となる。

例えば、フロントラインからスタートして、メロディーが順に後ろ向きに行進していく中、ベースラインや伴奏がセンターを通過していく。当然メロディーより伴奏の方が大音量で聞こえるため、バランスを調整する必要がある。

方法としては、後ろ向きに行進するタイミングで、メロディーの音量を上げる、または、メロディーを演奏するパートを後ろの列にも作る、伴奏楽器のベルの方向を工夫する、等々、客席でバランスよく聞こえるようコントロールしなければならない。また特にホルンは後ろ向きに行進すると、唯一ベルが前を向く楽器なので、場面によって方向や発音、音量に配慮が必要となる。また、全員が後ろ向きに行進するラインでは、隊列がだんだん遠ざかっていくので、バンドとしては、徐々に強く演奏しなければ音楽も遠ざかってしまう。理想的には、後ろ向きに行進している時の音楽は、デクレッシェンド、前向きに行進している時は、クレッシェンド、後ろのラインではメゾピアノ、前のラインではフォルテのような楽曲があれば、何の工夫も必要ないが、選曲が困難である。

大変細かい調整になるが、例えば列が左から右へセンターラインを通過していく時には、センターまではだんだん弱く演奏し、ラインを越えてからは徐々に強く演奏していくと、客席の真ん中ではフラットな状態で聞こえる。

音楽室で合奏する状態とはかなり異なるため、面倒な作業のようであるが、要するに客席で聞こえる音を優先に音楽づくりを展開するこ

とが大切である。

ならないのではないだろうか。

## 5、おわりに

本稿では、全日本吹奏楽連盟のマーチングコンテストを中心に検証してきたが、その他の大会にエントリーするバンドも、運動会でマーチングを披露する吹奏楽部も、定期演奏会でステージマーチングを考えている人たちも、基本の多くがここにある。

大きなショーとしてのマーチングは出来るが、パレードで列を合わせる事が出来ないバンドも少なくない。頭の前からつま先まで神経をとがらせて、列を揃える、微妙な音楽の表現やバランスにこだわる、吹奏楽連盟の規定演技に対するこだわりは細かいが、基礎基本を丁寧に修得することは可能であろう。

日本においてその他の大会にエントリーされているバンドも、このきめ細やかな音楽づくりであったり、針の穴を通すような列の合わせ方であったり、学ぶべきところは数多いのではないか。

アメリカDCIのトップコーを見ても、全日本マーチングコンテストの金賞バンドの方が、細かい列は揃っている。ショーの面白さは別にして、精度の高いマーチングは日本のお家芸ではないか。華やかなマーチングの根底にも、日本の文化に見合った繊細な心が存在してほしい。

音楽の世界においては、吹奏楽もマーチングも、まだまだ発展途中の分野である。近年10年ほどをみても、練習方法や演奏方法、音楽づくりに至るまで、目覚ましく発展している。特に吹奏楽の分野においては、どんどん新しい指導法・練習法が開発され、日本の文化に定着しつつある。

しかしながら、マーチングにおいては、まだまだ日本独自のものではなく、アメリカの発展に準じたものも少なくない。50年前にマーチングを取り入れた時もアメリカ式、現在の指導法もアメリカ式では、日本に根づくことは難しいのではないか。

これからの日本のマーチングは、軍隊でもなければ、ハーフタイムショーでもない。日本の風土や文化、そして環境に見合った新しいスタイルで、様々な音楽を動きで表現する。このことは、まさにマーチングの原点に立ち返り、我々日本人に合ったマーチングを追求することであり、また新しいパフォーマンスを生むことに繋がるであろう。そのためには、指導者が現代の日本に、より相応しい音楽づくりやマーチングのあり方を研究し、新しい指導法を追求していかなければ